

令和8年1月31日(土)

吹田操車場遺跡 現地説明会資料

吹田市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター

岸部中(北)住宅跡地では、吹田市の複合施設整備事業に伴って令和7年(2025年)10月から吹田操車場遺跡の発掘調査を進めています。

吹田操車場遺跡は、西の千里丘陵と東の安威川に挟まれた平野部にあたり、かつて「東洋一の操車場」と称された旧国鉄吹田操車場を中心に吹田市片山町・芝田町・岸部中などの地域に広がります。これまでの調査で最も古くは旧石器時代のナイフ形石器が出土しています。弥生時代になると竪穴建物が見つかることから集落が形成されていくと考えられます。古墳時代後期には千里丘陵に須恵器の窯が築かれ、須恵器生産の一大拠点となります。当遺跡では、須恵器生産に必要な粘土を採掘したと考えられている群集土坑も見つかります。古代(飛鳥～平安時代)では掘立柱建物が数十棟見つかり、いくつもの集落が点在したとみられます。そして中世(鎌倉～室町時代)になると耕作地へと変わっていきます。

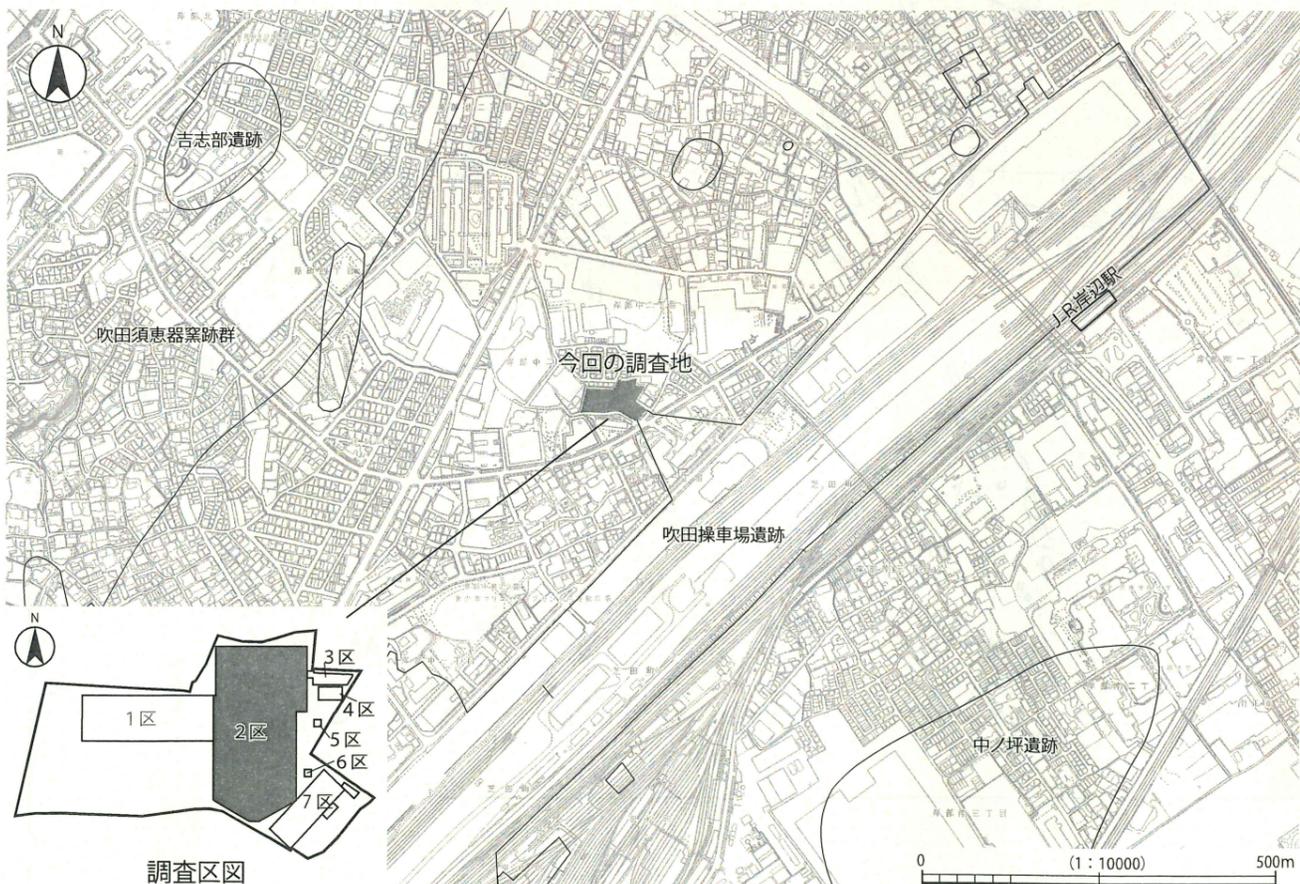


図1 調査地位置

今回の調査では、弥生時代から室町時代にわたる多くの遺構や遺物が見つかりました。

遺構については、特に中世(鎌倉～室町時代)は掘立柱建物をはじめとして、水路や区画溝として使われた大きな溝、耕作地の区画等が見つかりました。周辺が耕作地として開発される中で丘陵に近くやや標高の高いこの場所に集落が成立していったと考えられます。

遺物は、弥生土器や、古墳時代の須恵器・陶棺、古代の須恵器・土師器・瓦、中世の陶磁器・瓦器・土師器・東播系(東播磨で生産された)須恵器・石鍋等が出土しています。

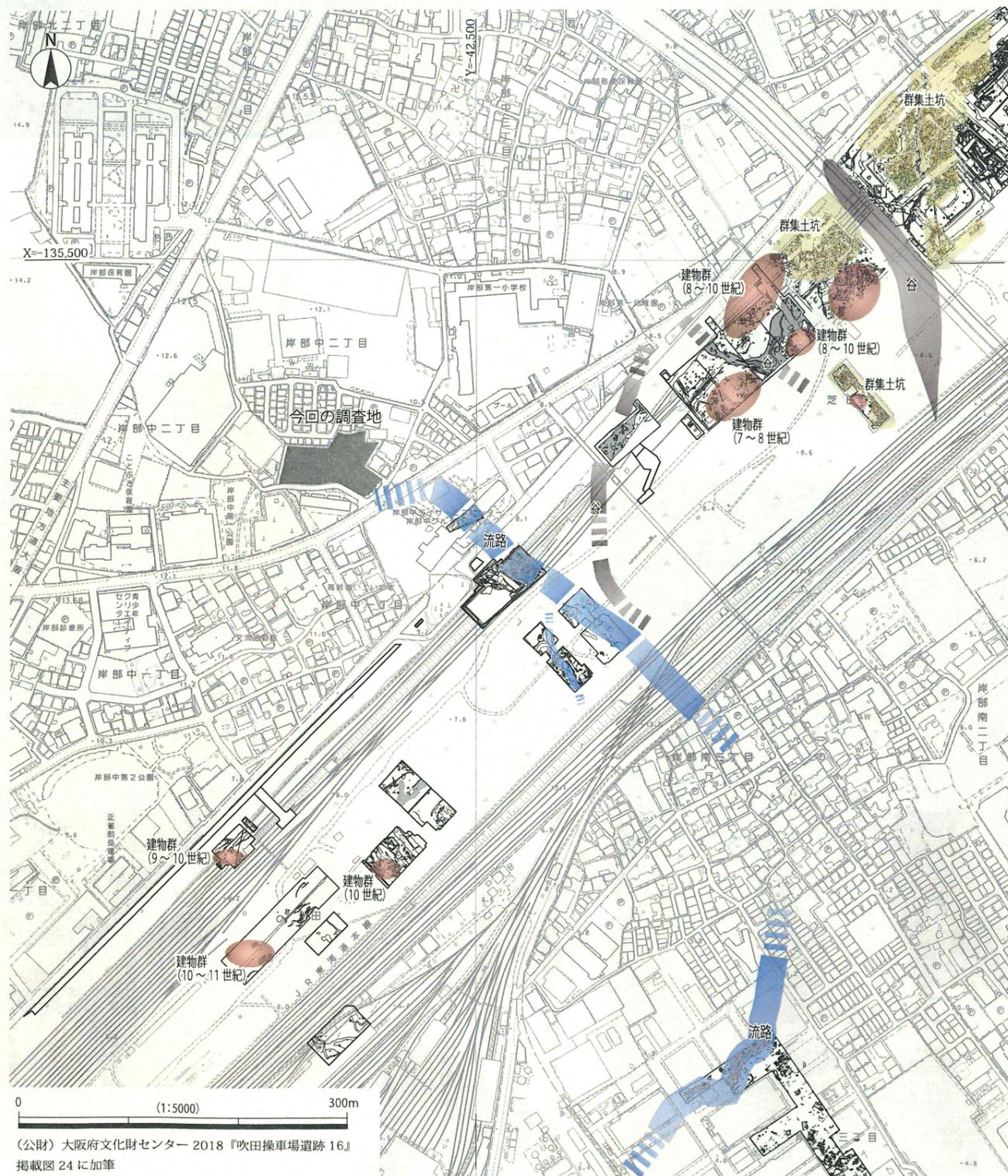


図2 既往調査成果



掘立柱建物 3・4、100溝 (南から)

調査区北西側で掘立柱建物が2棟並んで見つかりました。建物の北側から東側にかけては溝がめぐっています。建物の規模は、掘立柱建物3が桁行4間(8.6m)・梁行2間(3.2m)で南側と北側の一部に縁が付きます。掘立柱建物4は桁行2間(3.3m)・梁行2間(3.5m)です。



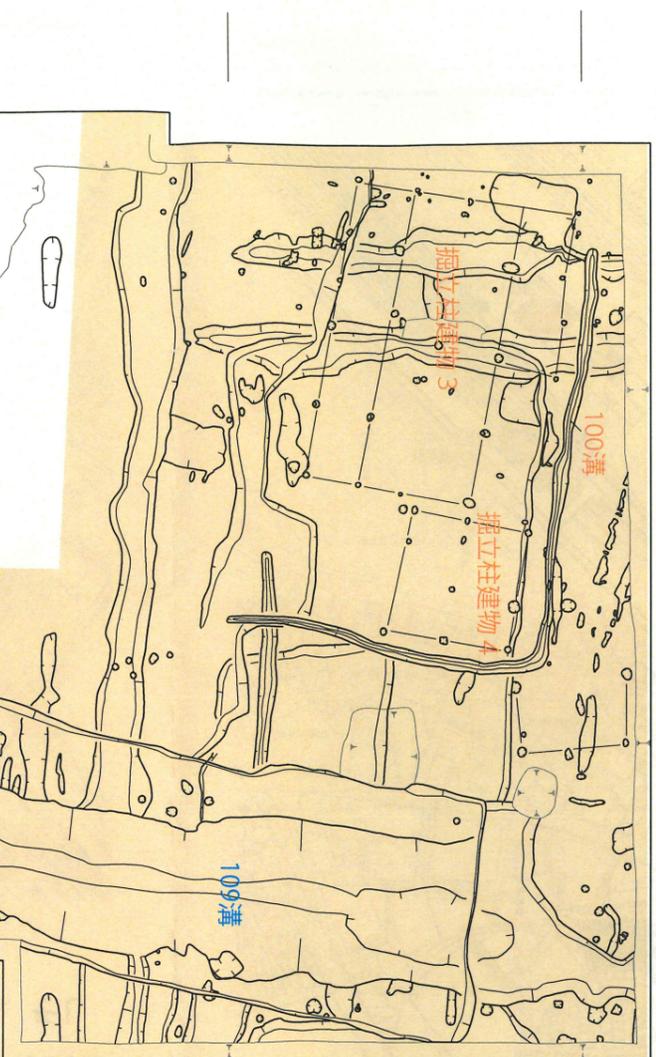
109溝 出土遺物

溝の中からは中国製白磁碗、瓦器碗、土師器皿、瓦質土器羽釜、陶器甕、栗槌、漆器須恵器鉢、漆器椀、漆器椀、石銅等の当時の人々が使用した生活道具が多く出土しました。12～15世紀の遺物です。



Y=-42,620

Y=-42,610



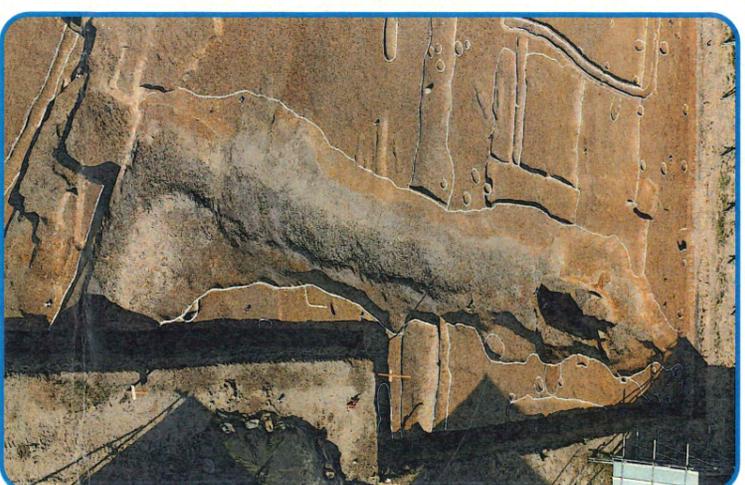
X=-135,660

X=-135,670

X=-135,680

X=-135,690

X=-135,700

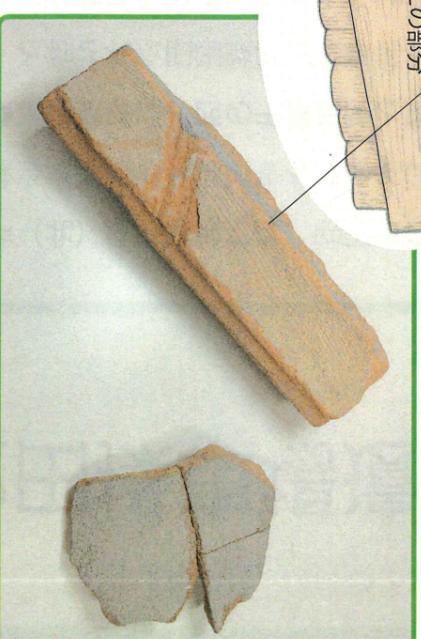
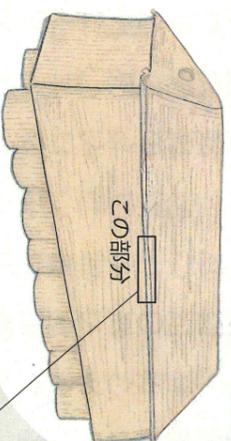


109溝 (南から)

調査区東端にある北から南へのび、直角に東に曲がる幅4.5m、深さ0.8～1.8m以上の大きな溝です。



掘立柱建物 5、263溝 (南から)



274溝 出土遺物

溝の中から、古墳時代の焼き物の棺(陶棺)の蓋が出土しました。



公開範囲

図3 遺構図